

# 大久保夢遊 『文明地獄極楽一周記』を巡って

池田一彦

大久保夢遊 『文明地獄極楽一周記』を巡って

大久保夢遊<sup>(1)</sup>（大久保常吉）の『文明地獄極楽一周記』<sup>(2)</sup>は、法木徳兵衛の漸進堂より、明治十五年二月に出版（明治十四年十一月御届）されたボール表紙本である。<sup>(3)</sup>撫松服誠（服部撫松）による題字、愛花仙史（三木愛花）による題辞、玩仏居士こと仮名垣魯文・醒夢居士による序が各二頁寄せられ、<sup>(4)</sup>漢文の自序もまた二頁付されている。<sup>(5)</sup>序に次ぐ口絵は、淡島椿岳による閻魔王と新政府の旗を掲げた将兵二人（将は西郷隆盛か）とが対峙した（見開きではない）二頁のものがあり、これが本冊唯一の挿絵である。題字以下、口絵まで緑の飾り枠に囲まれている（愛花の題辞のみこれに橙色の飾り枠がさらに内側に付されている）。本文はパラルビ。「総論」「地獄の部」「極楽の部」の三部から成り、総数全四十五頁（一頁十八字×十二行）である。以下にその梗概を記し、若干の考察を加えて見ようと思う。

○ 総論

全約八頁、全文二字下げ。書き出しは、

一切衆生悉有仏生南無阿弥陀仏のお有難き御経文も今や明治の 聖世に遭遇し恰も烈風の霧を払ひしが如く  
出離解脱の法言に習ふて南方の無垢世界へ往生寂滅するに及びしハ抑もまた明治開化の然らしむる所とハ云  
へ救世菩薩の説法に悖り五障の戒言もなんのその（ルビの取捨は筆者による。以下同じ）

云々とあり、仏の道を説く者達の「塵埃世界に浮遊して花柳巷頭に解語の花を手折」ったり「愚俗凡婦を口頭に  
誤摩化」したりするような焦熱地獄に墮落すべき輩の多いことを嘆き、今の世の有り様を「救世菩薩の娯経文も  
今ハ地を払ふて消滅し衆生を濟度するの方便ハ變じて衆死を成就せしむるの惨刻となり」云々と述べ、仏法に關  
して「地獄極楽」等の教えに対し「其化の皮ハ今に至つて忽ち剥ぎ取たりなど、慢言するもの天下滔々たるに至  
る」と慷慨する。「余輩を以て之を見れば寧ろ蠢愚の極点なりと云わざるを得ず」というわけだ。

釈迦の説法ハ設ひ法螺にもせよ其教法ハ設ひ馬鹿らしきにもせよ免に角仏法の開山ハ釈迦なり其一派を拡張  
して人をして五慾の泥に穢るを欲せず只管白蓮花の坐側を欽慕し後世一途に熱心せしむるに至らしむるもの  
ハ固より容易の事にあらず只其説法に感泣すべき所あればなり

と釈迦の説法擁護論を展開し、この説法に感泣し信認して毫も疑わぬのが一般なのに「古今其人種ハ同ふする  
我日本人」の「古への人ハ釈迦の教へに感泣し今の人ハ之を罵詈する」違いの有るを訝しむ。「或ハ之を説くも  
の、疎なるに原因するなきや」とも考えられるが未だ確実ではない。「今の学者」がこの世界を「地球」と名付  
け、これを円いものと信認して世の人が毫も疑わぬのは、只に「理屈」に帰因する。「地獄極楽」もこれに同

じく釈迦が案出したのは「理屈」に依るのだということになると言う。地獄極楽の实在に対し「近世人」の中で説が分かれるのが実情だが、「娑婆世界に生息するもの」にこの検証は為し得ることではない。

然らば則ち地獄極楽ハ之れありと為すも其益する所果して那邊どのへんにありと為す歟に至てハ余輩未だ仏法の蘊奥を記憶せざれば聊か其弁明に苦まざるを得ずと雖ども又其大意を摘録して考一考せば亦毫も社会に益なしと為さず

とし、釈迦の説法の概要を説き、自らの説明の拙なるを謝し、近世人が軽薄にも釈教を守らず「竟に我が国をして悪魔外道の淵叢たらしめんことを恐るゝの老婆心に出でたる」ものと弁明し、又、「地獄極楽の廃頽を恢復するの方便」を説明しようとするのだが、

アラお有難や南無阿弥陀仏と書き終るとき夢にあらず幻にあらず一陣の疾風颯さきと吹き来たり異香鼻に薫じて五雲天井裏に飄たなびき其中に救世菩薩の出現ありて曰く爾なんち馬鹿と雖ども又正直者仍て予今ま爾ちに囑するに仏法頽廢の恢復を以てす然れども今や明治の開化遠く十萬億土に達し地獄極楽亦大ひに其体面を改正せり爾ど暫らく茲に来つて地獄極楽の有様を熟見せよと救世菩薩自ら余輩が手を取り給ひて八幡の八幡知らずへ連れ行かれたり

ということになる。で、感泣していると地獄極楽の有り様を透き見するを得、以前の叫号も「今ハ変じて歓楽の声となり歓天喜地いづく何所の端はてまでも撃攘鼓腹せざるなき」の様子が窺えたのであった。が、果たしてこれも一つの夢だったと明かされて「総論」は終る。

余輩思わず一喝かいをる快哉かいかいと叫べば友人側らにあり呼で曰く起よ〜と余輩始めて目醒れば是れなん南柯の一夢

にてありき仍てその見る所を徐々左に縷述せん

以下、「地獄の部」へと進むのだが、総じて「総論」は、作者夢遊の仏法・仏教肯定論の立場に立ち、今現在の仏法にまつわる種々の墮落を嘆き、且つ糾弾する論調の文面である。古と異なる明治の文明開化の弊害として釈迦の教えへの軽視ないし否定の気持ちに諸人が抱いてしまったことへの諷刺の趣きが強いのがこの「総論」の眼目である。又しても「夢」物語の形式を採っているのもよくあるパターンであり、近世以来伝統の戯作の手法を踏襲しているのである（一方で又、明治初期の政治的作物が政府の弾圧から逃れる為、往々にしてカムフラージュとして「夢」を多用したという事情も有つて、その文脈に置いて見ることも十分必要なのではあるが）。

### ○ 地獄の部

全約十九頁。冒頭のみ二字下げで、以下のように述べる。

扱そろく余輩が禿筆を舐り黒き糞（あまり不潔な言ひ草だが）を垂れながらお経の文句にあらで開化地獄の有様を見るがまにく筆書廻しひつがまわし暫時しばや看客のお耳みみでなくお目を煩わさんと欲するも亦救世菩薩の指揮とハ云ひながら其鴻益ハ看客のお眠け醒しに止らず寧ろ一切の衆生を濟度するに足るべき歟と大測量にも独り早合点して嗚呼をこなる尻理屈ママを囀り出し酒蛙しやあこ乎として他力本願ハお有難きものなり看客疑ふ所あらば統々しやう躡しやうを接して娯愛顧あらバ庶幾こいねがわくハ極楽浄土へ往生するを得べしとハ操觚ふでとり者の勝手なれば看客必ず此法縲に欺かれず皆虚喝うそ八百を併べしものと娯承知ありて而して后愛読し給へね

以上が序に当る（本作中「不潔」のみがなぜか左ルビである——筆者注）。いかにも戯作といった出だしの書き様

である。以下、本文の言う処に従って行くと……。

古来、地獄と言えば或る程度相場の決まったものであったが、「今ハ決して斯の如き慘酷なる刑律なく」何をしても大目に見られるようになった。「故を以て一切の衆生ハ皆な其恩沢に感激し」て昔とは大違いの「安楽界と豹変」しているのだった。青鬼・赤鬼等も前非を悔いて新たに「商法」を営む者有れば「腕車」を挽く者も有り。而して閻魔大王に至っては昔と今とで大違いの様になっていた。

閻魔大王の如きハ纒むすかに宥なめられて旧血もとの池ぼとりの辺ほとり最も狭隘せうがいなる九尺二間店の土溝板どぼの上に屈居ます嗚呼其開化も亦偉大なるにあらざるや聞く此の開化の域に進歩せし所以のものハ全く西郷隆盛の功に拠ると余輩今其所以を左に説き出さん

かくて古今で地獄の有り様が大変化・大転換していたのであったが、今のような開化進歩した安楽世界に転じたのは、明治新政府の最大の功労者の一人であるにも関わらず、逆賊として西南の役で自刃して果てた西郷隆盛のお蔭だという意外の展開となる。

以下その経緯は次の通り。百万の軍兵を率いて三途の川を越えて一挙に閻魔王城に攻め寄せたのは、西郷隆盛、江藤新平、前原一誠等であった。

娑婆に於て不良を働なきしが為に地獄に墮落し其政体の過酷なるを見て忽ち三人の痼癩ころうに障り頻りに自由を唱えて我理々々亡者を煽動し遂に新政厚徳の旗を針いの山いたゞきの頂上いたゞきに翻ひへし以て専政主義の閻魔大王を滅却し自由の幸福を我理々々連に付与せんと欲するなり

時に地獄の王紀三千三百三十三年、風雲急を告げるに及んで、閻魔大王は「赤鬼青鬼及び午頭馬頭等」を召集、

防禦の策を議するのであった。大王の原案は「寄手城下に近づくを待ち各々肛門を開ひて臭気紛々たる糞汁を放注する」というものであったが、以下、赤鬼は昔楠正成が金剛山にて高時の兵に攻められた際、正に「糞汁」の一計を案じ一時は勝利を得たが、所詮は籠城の不利、最後は敗北した例しを引き「拙者ハ先づ血の池まで出陣して敵の要路を拒絶すること緊要ならめと存ず」と論じ、次に青鬼はこれらの意見を屁理屈と打ち消し、「利害も得失も論ぜず各々の得意なる勇力を磨し鉄棒を揮ふて敵の来るを待たず此方より先んじ制さバ必ず一撃の下に打ち敗るを得べし」と先制攻撃の議案を提示、甲論乙駁の挙句、青鬼の議が多数の賛成を得たのであった。閻魔大王は「塩辛を嘗めて英気を養い、赤鬼青鬼等は「皆な葵を嚼つて今世の暇乞をなし、その他の郎党等ハ「各々苦虫を食ひ潰し以て死出の用意をなし、いざ、出陣の段に及ぶや、今度は大王の細君「足立が原の鬼婆々」が大王との別れを惜んでの愁歎場と一転、突き放さんとする閻魔に対して荒漢たちが婆々の味方をし、争う内に閻魔は釜の中へと落ち込んでしまう。ところが丁度この日は七月十六日、釜の蓋が屁臭き疾風に持ち去られ、幸い閻魔の救出が為されると、いよいよ気を取り戻して戦場へ出陣の段にと漕ぎ着けた。時に貝鐘でも太鼓でもなく「喇叭の音プツプクプ」と響き「大砲小銃」山谷に鳴動、閻魔大王も勇んで迎撃に出るが、なんと今迄白鬼黒鬼に守らせていた血の池の辺に達するやその守護者も亡者も見当らず、敵軍もいつしか去って寥々たる有り様、ただ血の池に「鯰鱈」の喜ばしげに浮遊するのを見るだけだった。と、その鯰鱈たちまち凝って空中に飛び「一大坊主頭」と変じ、その「面腐つた南瓜の如き」にさすがの閻魔も腰を抜かす。大坊主頭は「カラ／＼グラ／＼と笑」って消えるが、天かき曇り血雨流れ風が亡者の骨を捲き上げるとたちまち変じて「数万の鳥」が大王を囲み、大王等を食らおうとする有り様であった。郎党どもが得物を揮ってこれを防ごうとするのだが、こ

れら一部始終を西郷たちは血の池の辺の葦の間から覗っていて、「即ち目を使ふて軍兵を指揮すれば四方に潜みし軍兵等ハドツト叫いで一時に起り無二無三に斬て廻り、不意を突かれた閻魔方はさんさんの負け戦、遂に閻魔大王は「恟むべし無慙や茲に生捕られ聞き囹圄に繋がる」とはなつたのであった。

西郷方の喜び豈に畜ならんやエイエイ声をつくりて一挙に玉城に攻め入り情け用捨もあらしく驚ろく一家の婦女子等を片端から縄かけて愚図々々云わずと、さあこい来れと引張り行く此に於て乎西郷隆盛ハ直ちに玉城に乗り込み蓮台（否）高台に登りて曰く天上天下唯我独尊と左右に居流る江藤新平、前原一誠、桐野利秋、篠原国幹、等及び一癖ありげな面々ハ一声同音高く呼んで曰くそれハ釈迦牟尼和尚の仮声ならずや隆盛笑つて曰く吾れ亦一派を拡張して蒼生（でハない）亡者の塗炭に苦むを濟度せんと欲す其一念今や全く貫徹するを得て遂に玉城を奪ひ得る諸君益々努力を奮ふて吾れを助け文明開化の基礎を鞏固ならしめバ則ち地獄の王様我独りなりイザヤ面々犢鼻褌を固く給へと

そこで先ず江藤新平を「賊徒征討大総督」に任じる。「遺賊を打ち敗る仕事だが、「至公至平の取計らい」で「惨課酷令の地を払」うや亡者から万歳の声が立ち上る。前原一格は「貝拓使長寒」。針の山や剣の山や荒蕪の場所を開墾する役で、針を鉄道の用に供すべく全て抜き束ねると「其数凡て十二万三千四百五十六束」であった。村田新八は「功無卿」で、至急これらの針を「溶解して鉄道を設置す」ることを命じられる。鉄道設置は「未曾有の大工事」なので、亡者こと「我利々々連」に謀って為さんとするに「自由政府の下に生息する」我利々々連は喜んで、この「鉄道会社設置の大工事」に協力を惜しまないのであった。先ず郡県に令し地方から計画、着手するに至る。

今や六道の辻より地獄の都に至る迄ハ既に鉄道の設置あり又電信の架設ありて我利々々連の喜び大方ならず  
 皆な其聖恩の優渥なる文明開化の有難きを感佩せざるものハなきなり

「地獄の釜」ももはや不用とて鉄道の用に供するの英断に出、「将来惨酷なる釜烹の所刑の跡を断」つて我  
 利々々連の感称を受け、又、三途の渡しは渡船では不便利なので「俄かに石工を備ふて目鏡橋を新架」し、血の  
 池は「地塘に桜樹を植へて人民の遊園地とな」つたのであつた。

嗚呼其開化の駿速なるも亦偉大なりと云ふべし此に於て乎西郷隆盛ハ天下大に治まり最早大安心なるを以て  
 竟に真個に地獄国王の宝祚を踏み功を論し賞を行ひ功臣に授くるに各官爵を以てす  
 で、その結果は次の如くであつた。

- |  |      |
|--|------|
| 免 <sup>メ</sup> 賊徒征討大総督 <sup>ヲ</sup>                                | 江藤新平 |
| 任 <sup>ニ</sup> 儒冗大尽 <sup>ニ</sup> 除 <sup>ニ</sup> 醜逸位 <sup>ニ</sup>   | 篠原国幹 |
| 任 <sup>ニ</sup> 峻大尽 <sup>ニ</sup> 除 <sup>ニ</sup> 醜逸位 <sup>ニ</sup>    | 桐野利秋 |
| 任 <sup>ニ</sup> 迂大尽 <sup>ニ</sup> 除 <sup>ニ</sup> 醜逸位 <sup>ニ</sup>    | 前原一誠 |
| 任 <sup>ニ</sup> 戮軍大将 <sup>ニ</sup> 除 <sup>ニ</sup> 正三味 <sup>ニ</sup>   | 島義勇  |
| 任 <sup>ニ</sup> 参偽兼多羅卿 <sup>ニ</sup> 除 <sup>ニ</sup> 正三味 <sup>ニ</sup> | 西郷小平 |
| 任 <sup>ニ</sup> 参偽兼仕方卿 <sup>ニ</sup> 除 <sup>ニ</sup> 正三味 <sup>ニ</sup> | 別府新介 |
| 任 <sup>ニ</sup> 参偽兼害無卿 <sup>ニ</sup> 除 <sup>ニ</sup> 正三味 <sup>ニ</sup> | 池上四郎 |
| 任 <sup>ニ</sup> 参偽兼内無卿 <sup>ニ</sup> 除 <sup>ニ</sup> 正三味 <sup>ニ</sup> |      |

任<sub>ニ</sub>参偽兼文無卿<sub>一</sub>除<sub>ニ</sub>醜死位<sub>一</sub> 木嶋 清

任<sub>ニ</sub>参偽<sub>一</sub>除<sub>ニ</sub>正死位<sub>一</sub>貝拓使長寒如<sub>レ</sub>故 前原 一格

任<sub>ニ</sub>参偽<sub>一</sub>除<sub>ニ</sub>正死位<sub>一</sub>功無卿如<sub>レ</sub>故 村田 新八

任<sub>ニ</sub>参偽兼戮軍卿<sub>一</sub>除<sub>ニ</sub>醜死位<sub>一</sub> 辺見 十郎太

任<sub>ニ</sub>参偽兼貝軍卿<sub>一</sub>除<sub>ニ</sub>醜死位<sub>一</sub> 益田 惣太郎

任<sub>ニ</sub>苦那威卿<sub>一</sub>除<sub>ニ</sub>正尼位<sub>一</sub> 奥平 謙輔

右のように「廟堂の組織」も成り、「地方郡県の分離」も功を奏し、「今や大安心の安楽界と豹変し絲竹の声音に狭斜の地のみならずへらくステコ、の発明戯出でて紳士豪商社会の間に行わるゝに至」ったので、「昔日の惨酷地獄と雲泥の大差を生」じたのであった。かの閻魔王はと言えば、「血の池の辺最も汗穢なる土溝板の上に屈縮」したのを以て僅かに宥され、その地を賜わるも「其後進退如何の娯沙汰もなく」、そのまま差し置かれて少しく不平を抱くと言う。

之を以前閻魔の制治に比すれば其寛庄の差異ある月豔も畜ならざれば兎にも角にも文明開化の御世に豹変して自由の世界に浮游するを得る人民こそ実にお有難き次第なりナンマイダー、ミヨーホーレンランナブキヤ  
ー、ズドンガドガく、ダブダブくと目出度筆を止めて開化地獄の局を結びぬ (畢)

以上が「地獄の部」である。誤字もそこそこ見受けられるが、意図的であろう借字・替え字の如きものが多用されているのが表記上の一大特色で(但し、諷刺・滑稽的の寓意性の認められるものからそうでないものまで種々のものがある)、又「糞汁」などの野卑な語も散見する。最大の眼目は、地獄が開化して安楽界と変ずるに、閻魔

大王を打ち破った西郷隆盛等の功績が強調されていることである。明治十年の西南戦争関係者が最も多いが、明治七年の佐賀の乱（江藤新平、島義勇）、同九年の荻の乱（前原一誠）などで士族叛乱の逆徒として処刑されたり戦死したりした連中が、却って地獄の圧制を取り払い、開化・自由の風を導き入れたという皮肉な設定。本作は明治十四、五年の作であるが、直近の内乱で死んで逝った者達を敢えて取り上げ、彼等の名誉回復を目論んだものという見方も又可能であるかも知れない。

### ○ 極楽の部

全約十八頁。冒頭は極楽国の説明より入る。

娑婆世界から十萬億土離れて一名浄土と言ひ、地獄と隣り合う国で、宗教は真宗日蓮宗浄土宗等いろいろと分かれるが、「皆な天上天下唯我独尊と耶斯多羅女の横腹よりヒヨツクラ飛出し生れながらに大言たる釈迦無尼如来を本尊国王と崇め」ない者は無く、人民は大方頭を丸め、国訛くにまじりが分明でなく、衣服は白か鼠色を尊び、大礼服には緋や紫のひだある袈裟を着している。またこの国には「一種奇妙の習慣なまじり」があつて、婦女や酒や魚を忌み、五戒とか八戒とかの「法令」が真宗以外ではやかましいと言ふ。この国の「方言」も変わつていて、女房を大黒、酒を般若湯、玉子を目鏡、鯉節をまき物、鱒を躍子をどりこなどと呼ぶので他国の者には聞き取れない。

然るに国王釈迦牟尼如来ハ近來西洋風に吹れたるか頗る心を文明開化に傾け大臣参議ともいふべき衆羅漢にみことのり詔を下し前まへきに立憲政体の事を天下に布告したるに衆羅漢中あつれきにハ頑固なるもの多く開進主義なる者と互に其論鋒を交へ相軋あつれきすること甚しく国王も為めに痛く心配し國中何となく隠かならず

そこへ塞さいの河原の県令地蔵が「表」を以て「地獄の変乱」を上申、西郷隆盛が「新政厚徳の旗」を掲げ今迄の「压制主義を一変し専ら自由を旨とし」て上手く治世しているとの報告を為す。国王はこの表を見て衆羅漢を召集、「朕ちんハ是より使臣を派し隣国の事なれば地獄に至らしめ西郷隆盛の即位を賀し序つひでに其国開化の様子を目撃せしめ一番我国の政体を変し肩まを並べんと思へ如何に」と述べるが、衆羅漢中に「頑固守旧」党派と「開進」党派二派あつて収拾がつかず、国王は独り「蓮の台うてなに潜み居る有名の通人伊左衛門長右衛門助六権八」等を召して一つの会議を開けば、「其議遂に地獄の形勢を視察せしむるに決せし旨」議長より奏上あり、「開進党の巨魁といはれし親鸞日蓮等十数人」を選出し地獄に派遣せよということになる。これに開進党は大いに喜ぶが、守旧党は大いに恨み「猿と犬との根情こんじやうより深くも遺恨の事におも」い、開進党を叩き潰すべく密談し、「生通人等を一々殺してへない生いして遣らん」など様々の案が出された内に、「国王の妃いハ最と怜悧りやうにおはすれども夙しゆとに怪化け（この用字は本作にこの一箇所のみ——筆者注）を嫌へせ玉」ふのを利用し一行を呼び返そうという議が通り、「開化党の大頭領とも謂つべき某それがしを暗殺し又ハ毒害して二三人を押し付け、妃に親鸞日蓮等のことを譏言したので、国王も「朝廷ていに出れば守旧党の為に攻られ又宮に還れば妃のために迫られ大ひに閉口の場合とな」り、仕方なく「目蓮」に命じ一行を呼び返すこととなる。目蓮は「固神通第一の羅漢」なので忽ち「一羽の燕と化」して飛び去る。時に開進党等は三途の川に到着、「地獄より渡航し居る山靈会社の黒船」で地獄に渡ろうとした折しも燕が舞下り「忽ち一人りの官員とな」つて国王の命令を告げる。親鸞日蓮等は呆れつつも国王の命令ではと旅宿に帰り、山靈会社との契約もあつたので罰金千円を支払つて無念の帰途に着くのであつた。

此後開進守旧両党の軋轢ハ日を追つて甚しく人民も何となく人氣じんきたちは是も亦守旧両党の二派に分れ或ハ巷ちまた

に譲し家に論じ寄るも障るも皆な国を開く開かぬの議論あらざるハなし

ここに「富婁那」という一紳士、「固とハ朝廷の重役」にして一個の開進家がいて、「不図地獄にハ近来頻りに演説といふもの流行する趣きを聞」き、自分もその昔「説教に於てハ羅漢中の第一人」だったのを頼みに「陳文漢語を以て何だか小六かしき引札をまわし又辻々にハ何日何時何処に於て演説すと張出し」て守旧党の目を覚まそうと企画、演説の意味も分からぬままに落語や講釈を聴く気分でも人民もこれを楽しみにしているのだった。そこへ警視の長官である「舍利弗」は「生れが相撲取として腕力を好む」一大守旧派であつたので（一般には釈迦十大弟子の中で智慧第一と言われる——筆者注）、富婁那の演説中「国安を妨害するが如きことあらバ直ちに差止ん」と待つ中、いよいよ富婁那の演説の日とはなつたのだった。「靈鷲山」という説教場に「演説の二大字を書したる大扁額」を掛けて「論題守旧開進ノ利害」との札を張つてこれを演説、いよいよ「蓋し守旧ハ压制政府の主義とする所にして甚だ我輩の感心せざる所なり」云々とやるに至ると途中で舍利弗は国安を妨害するとて「警視官の三字とサーベルを権にか」け、解散の命を下し、富婁那を引き連れその庁に手続書を収め、翌日直ちに令を下して富婁那の都下での演説を向こう三年間禁じたのだった。このこと早速に国中の評判となり、両党の軋轢は過熱するが、守旧党の巨魁が国王の父である「彼の加毘羅城の淨飯王」にて人皆な大院君と尊びあへる「人なので、開進に心の向いている国王も困じ果てる始末。或る日窈かに氣に入りの親鸞日蓮二人を呼んで相談の結果、今度は「二人窈かに地獄に渡り委しく其国の様子を探り来」らせることに決し、守旧党の妨害を防ぐため、却つて守旧党からも二三人選んで参加させるのであつた。親鸞日蓮等は快からず思つたが、考えればこれは国王の深意に出ること、これで守旧党の口を封じ、一方地獄を実地に見れば前非を後悔することもあろうかとの深慮に

依ることかと思ひ改め、一行は再び三途の川迄来て旅館を取って船都合などを問い合はすのだった。するとこの地の「地獄公使館より領事十大冥王」という八の字髯の開化官員が尋ねて来たので、一行はさまざまに持て成して宴たけなわ酌しやくの時分「地獄巡遊連の一人なる貧僧ひんそう覚」という者が目をしよぼしよぼさせるので、十大冥王は「我國の名薬精気水」を勧めたが、日蓮が「此な奴の目ハ地獄の開化風に吹れぬうちハ決して愈あゆることなかるべし」と言つたので一場の舌戦となつたりもしたが、その日はそのまま就寝したのだった。翌日、地獄山霊会社の「瀛船血ちの池丸いけまる」に乗船して地獄に進むが、これが「指折りの駄船はやふね」だったので船に慣れない極楽人は船酔いに苦しんだ。

兎角するうち血池丸ハ三途川を馳下り日を経て地獄の互市場なる長鷺と云へるに着けり此長鷺と云へる港ハ地獄国五港の中にも随分繁昌なる港にて県令ハ属官を遣はして親鸞日蓮等一同を迎へしめ用意の旅館に誘ハしめたり是より極楽人の一行ハ遍く長鷺県の県庁議院博物館等を遊覧し各々其結構等に驚きたり長鷺を見終りて夫より大佐賀に出でたるが此地ハ府にて地獄三府の一なり家富み人榮へて市街美麗に電信といひ鉄道といひ見るもの聴くもの毎に極楽人ハ目を驚かさざるなく夫より府の役人に伴ハれ懲役場博物館学校等を見て驚嘆し磁石橋の両つに分れ又合ふ等を見てハ余程たまげたる様子なり只可笑しきハ極楽人の癖として五戒のあるためか女を畏避いへきすること甚しく既に大佐賀府の病院を見たる時病室を間毎まごに見物せしが女を見ると忽ちに逃出す様に走り去ること常なり

もつとも、地獄人の説では極楽人は女を嫌うのではなく、「下地ハ好なり」との付け足りがある。

さて、親鸞日蓮一行は、長鷺（長崎のもじり）、大佐賀（大阪のもじり）と見て来たが、更に西京と東京へと向かう。

扱親鸞日蓮等の一行ハ到<sup>いたる</sup>処<sup>ところ</sup>ごとに委<sup>くは</sup>しく筆記し大佐賀より鉄道にのり西京に出たり此処ハ騒動前地獄の都  
なりしかば名所旧跡も最<sup>も</sup>と多く且つ此地ハ美衣美服を織出し学校ハ就<sup>なかんづく</sup>中盛んにして聾<sup>つんぼ</sup>啞<sup>ご</sup>の学校もありて極  
楽人ハ皆舌を巻ひて驚き頗る開化を慕ふの心を生じければ同行人の中にも親鸞日蓮等ハ左もこそあらめと  
心の内大ひに喜び未だ肝心要の東京即ち西郷大王の輦<sup>れんか</sup>下に至らざるに既に此の如くなれば若し東京に至りて  
開化の極意を知らば貧僧覚をはじめ甲<sup>な</sup>も乙<sup>かれ</sup>も皆開進党と変性すべしと痛く其事を樂めり

で、いよいよ東京行きとなり、その詳細が語られるべき筈であるが、ここはやや作品として肩透かし、

嗚呼此一行が地獄の帝都東京へ至りし後の話ハ如何ならん又東京を巡り果て国に帰りし後ハ如何ならん此一  
行が京都を出る時一声鉄道の汽笛に我輩が夢も攪<sup>かく</sup>破<sup>は</sup>せられたれば其後の事を知るに由なかりしハ呉々も遺憾<sup>うらみ</sup>  
なりき

というのが「極楽の部」の終結である。「極楽」とは言い条、地獄の開化に見習おうとする辺り立場が逆の感を  
否めず、又、或る意味滑稽で馬鹿げた設定である。しかも、頑固守旧党と開進党両派の軋轢が釈迦の弟子達から  
人民に至るまで深刻に生じているのは、却って開化で安楽を勝ち取った地獄よりも不穩で「極楽」の名にそぐわ  
ないものの如くでもある。見ように依れば、地獄よりも地獄的な始末の悪い状況である。「総論」同様、全体が  
仏教色に覆われているが、右のような状況は言わば釈迦、仏の教えに悖るもので明らかに理屈が転倒している。  
「地獄の部」の閻魔と西郷一派の戦い同様、この部も或る種の戦いが描かれていると言つてよい。又、古来説法  
第一とされる富妻那の「演説」も一つの山で、開化の遅れた極楽では論題の札の脇に「聴衆若シ演説ヲ以テ其当  
ヲ得タリトスル時ハ説教ノ時ノ如ク念仏ヲ唱ヘズ拍手シテ同意ヲ表スベシ」と書いてある（本作中に異色の漢字

片仮名交り文である——筆者注）など近来地獄に流行すると聞こえた「演説」を巡る探りなども差し挟みつつ、明治十年代大流行の「演説」の場の雰囲気やパロディー化して盛り込んでもいる。更に、仏徒の内重用されているのは親鸞・日蓮で、彼等一行が恰も岩倉使節団一行の如くに、地獄を長鷲・大佐賀・西京・東京と視察して巡り歩くという地獄巡りの趣向が「極楽の部」の眼目であった（東京視察までは描かれなかったけれども）<sup>(6)</sup>。

「総論」の部以降、見る人・書く人・語る人としての「余輩」の一部登場を除いて、「余」こと作者ないし作者の仮託された登場人物の主観的な視点と身体・行動は殆ど意識されることが無い書き様である。事柄に対する客観的な記述の仕方が本作の大部分を貫いていると言つてよい。

本作「地獄の部」の一大眼目は、西郷隆盛勢と閻魔大王勢との戦い及び西郷側の勝利ということであったが、これは、実は三年前の刊行にかかる、当時数ある西郷物の一つ『西郷地獄征討記』<sup>(7)</sup>の案を先蹤とすると思われる。地獄に墮ちた西郷が多く下部に囲まれて、凶らずも「生徒等が彈藥暴徒により吾多年の忠精も水の泡」となり、歎願も果たせず「朝敵の穢名を蒙り皆喰違ひ朝廷に利する事不能冥土の旅行に歎迷ぶ心推量あれと悔」む処へ、注進来つて「一手の軍兵に閻魔大王の下知下り西南の暴徒一人も不殘劍の山へ追上よ」との動きあるを聞き知り、「是を聞人、大ひに驚き西郷隆盛大ひに憤怒致し吾日本に威を震ひ負はする共勝負ハ時の運地獄に落て鬼共の呵責を受たと聞てハ末代迄の武名の名折譬へ閻魔王何万騎の眷属有とても吾參謀の指緩をしき閻魔城を微塵にせん」と閻魔に挑む話で、戦闘にまつわる西郷側の軍人と閻魔側の諸魔王との攻防が極めて具さに描かれ、一種の軍記物としても（或いは広義のSFとしても）相当の面白味を有する佳作であり、変体仮名の表記・活字が特徴あ

る物であること等相俟って、これはこれで十二分に興味深いものと言つて良い。全二編から成るが、話は二編で完結しているとは必ずしも認められず、厳密には「未完」と言える。初編は、「西郷隆盛暴徒を引卒して地獄へ趣く事 並暴徒の面々大評定の事」と「閻魔王宮大勝利酒宴の事 並西郷桐野等王宮夜討大戦争の事」の二章から成り、二編は「西郷隆盛月照僧に面会を致す事 並地獄勢を地雷火にて塵にする事」と章題が付されている。各章題が本編の内容を要約している形ではあるが、繁雑になるのを承知で、より具体的にその内容を記して置かう。

初編の第一章では、冒頭、西郷隆盛を始めとして西南の戦争で亡くなった大将分三十八名の実名が全て記されて居り、作品のリアリティ(?)を醸し出している。先述の如き経緯で、閻魔王との一戦に及ぶことになったので、閻魔城を攻めるべく西郷は先ずその手配りをする。第一番隊は石井武之助に五百騎を引率させ閻魔城の東の方面影川の業の松原に陣取らせ、第二番隊は河野半蔵三百騎を引率して王宮の西表磯露居山に陣取る、第三番隊は山口幸右衛門・肥後助右衛門三百五十騎を引率して法戒山鷲が峠を取って閻王城廓南口の緩門を眼下に見下ろすようにした。村田新八郎等究竟の強の者八十人は、明業寺無別法の森に忍び入り、前原一誠は「横這の沖」へ軍艦数船に取り乗り海軍を司るようにする。西郷等は霞ヶ嶽・山彦が峯に本営を構え、桐野利秋等五百騎は五道大手の門に向かい、搦め手姿見の関へは村田三助等七百騎が固め、残将は遊軍として本営に控えたのだった。この事、閻魔王宮に注進されるや大王は大いに憤怒する。そもそも閻魔王宮は「無仏世界預彌国の中央」に有り、皇居の東は剣の山、丑寅に八大地獄、卯辰の方に死出の山八苦堂、辰巳より戌亥の間に葬頭川有り、末は無辺の海蒼海に続く。城の後は霞が嶽・山彦が谷を隔て、左に鷲が嶽、右に磯露居山、前は剛伽藍という平地が有る。

「凡<sup>およ</sup>十万八千里の間」を十王の住所とし、その外は無限である。数多の国々には「一億九万九千五百八拾の眷属共」が住んでいる。さて、閻魔大王の住む「帝都ハ二百八拾余里の間皇居ハ百三拾里四方を垣籠<sup>かいたま</sup>七重の堀千斤の石を持って立重<sup>たてかまね</sup>四面の囿<sup>かこみ</sup>重鉄の矢倉八方に黒鉄の樓門」が有るのであった。宮殿の数は六十四殿、「雲响殿」という高樓が有り「天等閣」とも言う。「余宝の緩門四半に開き庭上籬の中光耀<sup>かまくやく</sup>」として地にハ金の砂を備へ銀屑を敷り純金の階<sup>まきざは</sup>し瑪瑙の柱珊瑚の行桁<sup>ゆきげた</sup>水晶の戸開瑠璃の葩<sup>とびら</sup>琥珀の梁<sup>うつは</sup>り鳳凰の瓦ハ五色に輝き」といった美を尽した有様である。

さて、戦は銀魔王を惣大将とした一万八千余人と暴徒の一番隊石井武之助率いる五百余騎とが、七月八日面影川に対陣し、対戦する。西郷が前原一格を召し遊軍二百余騎を援軍に送ると、手負い過半死骸戦場に満ちている中、石井勢の若武者荒川武国と西邑元信が大奮戦しているのだが、銀魔王側が数に任せて優勢、石井武之助は已に手疵三ヶ所ほど負って後陣の味方に合流すべく落ち延びようとするも銀魔王側の勢いにそれも果たせず、橋詰で腹を切らんとする時しも前原が駆け付けこれを救うを得たのであった。銀魔王側は、赤鬼太郎左衛門、黒鬼九郎太、青鬼三太郎、黄鬼清六、白鬼彌藤太の五鬼が一格に打ち懸るも、荒川・西邑が引き返して来て加勢、二時ばかりの戦鬪で、前原が赤鬼太郎左衛門を見事討ち取り、首を取って鯨<sup>ししき</sup>の声を揚げ、荒川・西邑を左右に従え、自ら殿して兵を引き揚げたのだった。銀魔王はこれを追い懸けようとしたが、太陽も西に傾いたのでこれで十分の勝利を得たとして凱歌を上げて西面影川へと引き返したのだった。

第二章。初戦の勝利に喜んだ閻魔大王は、酒宴を催す。銀魔王、随黄具王、雲氣王、雷火王、阿志良王、百官王、手早魔王、鬼火王<sup>きがん</sup>、水雷王（一般に知られる「十王」は、秦広王、初江王、宋帝王、五官王、閻魔王、変成王、泰

山王、平等王、都市王、五道転輪王であるが、ここでは異なった名称が用いられている——筆者注）や冥官俱生の鬼卒獄卒等まで惣人数一億九万九千五百八十人が、宮殿狭しと集まった。大王は今明兩日（七月九日、十日）「不礼講」と唱え、集った皆々に酒肴を与えた。皆それぞれに詩を吟じ歌を謡い、踊るも舞うも有ったが、閻魔王いよいよ歎び「罪人の内に今様の歌に委敷者あらば勝手次第に饗を催し候得」と赦したので、獄卒どもへ皆々触れ回して遊宴を尽して恩賞を蒙ろうと探しに出たのだった。

さて、石井武之助は河野半蔵の陣へ逃げ帰り、西郷等九名の勇將たちが河野の陣に会合、河野が戦の次第を物語れば西郷は「凡軍ハ負が負不成勝が勝ならず吾謀計あり」と小平を使いに出し、諸將諸士に「此度ハ吾が謀計に落ん小歌を謡ひ舞を能為者を一人用可事有り」と言うや永山九成が名乗りを上げた。「君行んとなれば武具を脱棄罪人の中へ打紛り吾々の悪き歌を謡ひ王宮へ入込可し」と述べ、又、「今七人身の丈六尺有余の者」と言いも終らぬに、各將の下より熊川春彦、黒田大五郎、松山国光、藤川白太夫、島田源蔵、同名段右衛門、岩見鉄太郎の七名が名乗りを上げた。西郷は「各々方ハ布を以て鬼共の面鉢に拵へ閻魔王宮酒宴の席ハ恐悦の鬼獄の卒共の中へ紛込で尤も下にわ小具足小手髓当にて身を堅め能時分に相図の狼烟を揚られよ其時吾を始め桐野篠原の諸將士卒を引卒し王宮へ攻入大将分を打取り能時分に勢を引揚」ようとの謀計を授けるのだった。

一方、王宮では獄卒たちが大王の命により「今様の上手の者」を探していたが、一人美音で「西郷殺して日野原行ば桐野露やら泣やらヲヤマカチャンリンヨイシヨコリヤ〜」と手拍子打って歌う者あり、閻魔王の前へと連れて行く。九成が「是ハ新版日本にて時行歌私ども娑婆に座す時哥ひ在て御去る」と西郷を馬鹿にした歌を数々面白おかしく歌い続けるに獄卒どもの酔いも深まる。そこへ番卒が「城外の俱生の者御悦びの御祝儀に流行

歌踊を御上覧に入ると凡五拾人程推参」の由を注進、まんまと王宮に入るを得たのだった。かくして皆々酔いが回った丑満頃に時分はよしと相図の狼烟は揚がり、かねて西郷の策略通り内より門は開かれ、大手門から搦め手門から千余騎ずつの西郷軍が攻め入り、夜討ちを仕掛けて「戦争の花」は綻んだのだった。両者烈しい戦闘を展開、繰り返す中、永山九成は銀魔王に斬り付けて遂にその首を掻き落とし、一方、七人の勇士は同じく雷火王・手早魔王の二将の首を打ち落とすの戦果を得る。大手の西郷に搦め手の桐野勢も合流して閻魔勢は総崩れ、西郷の奇策は大成功を収めたのだった。

次に第二編。負けを取った閻魔王は、西郷勢に一矢報いるべく総勢一億二万五千人の態勢を整え、特に「連車馬」という「前ま先に馬一万疋に車を引ひせ其上に板を張はり詰石弓礮とまふを積つ重かさね平攻にぞ押出す其形勢鉄圍てつゐの如ごとき、言いわば戦車をも用意する。一方の西郷は、弾薬の用意無く弓帯剣のみ、本宮の下に逆茂木を敷き大木大石を積み重ねて備えた。閻魔勢は霞ヶ嶽、山彦が峯より三里隔てて陣取り、先ずは随黄具王が攻めるも別府新助がこれを防ぎ、怒る閻魔王には雲氣王が堅城を攻めるには謀が要ると宥めるのだった。西郷は、大軍を山へ引き上げ火攻めにせんと思いつつ、八人の強兵と砦の地理回り・巡覧に出るのだが、不思議の建石が埋れているのを発見、掘り出すと石櫃が有って、中に結跏趺坐した異人は何と「清水寺月照」であった。共に薩海に身を投じてよりの互いの物語、月照は西郷の攘夷の策を可とし暴徒の策を悪と為しつつ、自らは王政復古を祈り事ここに至った経緯を物語る。西郷は前非を悔い一つもこの度の戦では火攻にする為の弾薬無きを歎くのだが、月照は笑って「凡兵器弾薬ハ西南の海辺に有ん海軍の將に命て取寄んに手間隙入らん」との名案を提示、「海軍前原一誠の軍艦横這の沖へ指揮を先」と大いに悦び西郷一行は本宮に戻った。

西郷は諸將に、海軍前原の下へ兵器彈藥積み取りの急使いを遣わし一時も早く取り寄せるべく語らい、村田三助、平山新助の両名を使いとし「西洋にて作し風船」で行かせることとした。西郷と前原と両方から挟み討ちにして勝利する智策でもあった。「氣球」には雲氣王も手を出せず、村田等は空中より敵情偵察も出来たのだった。横這の沖近くでは、前原押さえとして「生塚の老婆」が大八地獄の鬼卒獄卒七万余騎を従えていた。西郷より先に地獄に行った「肥後の神風連豊津の暴徒等」皆禁固されていたが、今度の戦争を聞いて評議に及び、生前の近付きであった前原の下へ行こうと決したが、駈け付けたのは約四千八百人、前原と合流しようと「肥後神風連」「豊津正義党」と書いた大旗を押し立てて進行する。ここに、前原一誠は軍艦より生塚老婆を睨み、七百余人を小船四拾艘に乗せ矢を射かけなどするが勝敗は決せず、前原は駿馬に鞭打って逆波立てて敵地に乗り込みんとし、五騎がこれに続いて海の向こうの流れ州へと渡り付いたので、地獄勢も辟易、軍艦・小船も一気に岸に打ち上ったので、老婆勢も葬頭川へと敗走したのであった。これを肥後・豊津の暴徒等が打ち破り、前原もこれを見て追撃、肥後・豊津の隊長方へ使い番を出し、一同軍評議に及ぶ処、物見の者が未申の方から「空氣船」の飛来を注進、村田・平山も陣営に入り、「今度陸軍の戦ひ計策の模様を知らず」と問う前原に村田がこれまでの一部始終を報告、西郷の命で強薬の西南の海底に沈んで有るのを調達に來た由物語ったのだった。前原は早速軍艦五艦を取り揃えさせ、西南の沖へ彈藥を引き上げるべく出艦する。

ここに大元帥雲氣王は天文を量り見、大白星が辰巳に流れたのを見て味方に不吉の星とし、それを引き直す法を施さんとする。一刻も早く賊軍を平鎮すべく総攻撃をかけんと四十九連の馬軍を十三段に分ち、縦よりは長蛇、横よりは鶴翼に似て一億余万の軍を五倍にも見せる布陣で攻めにかかる。片や西郷も霞ヶ嶽、山彦が峯の要

路諸所に砦を構え、東西南北に桐野利秋、篠原国幹、村田新八郎、大山綱良等にそれぞれ二千騎前後を配して自らの本営には「新政厚德の大旗」を押し立てて迎撃の態勢を整える。そこへ閻魔大王、鯨きまの声を上げて連車馬を十三段に備え攻め来るのであった。さて、諸所の砦は、北軍へ先ず阿志良王が「戦車」を伴い襲来、大山は大木大石で応戦、敵勢二万七千六百余人を打ち殺すもこれも打ち尽した処へ西郷小平が松明を以て救援、火の雨を降らせ十萬九千の敵勢も五万と減じて敗走する。東備えの陣には随黄具王の二十万余騎、西備えの陣へは雲氣王の三十万騎、南備えの陣には百官王・鬼火王の五万騎がそれぞれ襲来、南軍では松間正喜の奮戦もあるが勝敗は見えない。西を攻める大元帥雲氣王は「兵士さきの前を九曜たてに立中を甲軍七曜そなへの備乙を五曜に備大将の位備ハ三十六曜後軍二十八曜一曜の軍務の人数二千七百騎合曜八十五備」の陣立てで、西郷勢は大苦戦、本営の遊軍永山九成来って柵門を建て直しなどして防戦する。西郷は本営に控え、四方の注進に「千変万化の器械きかひ」を回し、篠原の陣へ「水鉄炮」二千挺を差し遣わすと篠原等はこれに熱湯を入れ弾き出し九曜隊を撃退、続く七曜隊には矢先に松明を結んで射出してこれも退ける。雲氣王は更に地獄の釜を取り寄せ、鬼卒五人へ一つずつ冠せて攻め登るがこれも大木大石で撃退。かくして容易く落城も覚束無いので、雲氣王は諸軍に下知して攻め口を差し置き陣々を堅め遠攻めの態勢に移る。雲氣王は天門の辰巳の方に大白星の流れるを見て驚き、後向勢二十八曜隊をして五音七三の鯨の声を発せしめ不吉の気を散らし、連車馬で要路を塞ぎ再び九曜隊を以て「敵を塵みこころしに先せん」と攻め登る。雲霞の如き敵に篠原の陣も矢種が尽きた処へ「木貫炮」七門が本営より到着、一発二発と打ち出せばさすがの大軍も二時間ばかりに三万余人討ち取られ敗色が濃くなった。対して勇氣無双、智謀第一の雲氣王は、後軍二十八曜を引き向かわし一枚楯の軽々したのを五百張作らせ、板の端に懸金と壺を打ちこの「楯の懸金を懸城の搔楯かたて

の如く」一二町程突き並べ、透間より射返して敵が引けば究竟の懸武者一万騎が駆け出るので、兩陣互いに時移るまで戦い疲れ怒りを圧え息付いているのだった。そこへ、海底の強葉を引き上げ老婆勢を追い崩した前原一誠が来着、それぞれ先隊から前原党、肥後神風連、豊津正義党の大旗を押し立てて西郷勢に合流したのだった。後隊は村田三助平山新助には「大砲数門小筒三千挺強葉二千箱」の内を諸隊へ分配、「五艦の兵器を五百の車」に積み重ね来ていた。前原一誠、時分はよしと号令を下げば「大砲五門小筒一千挺」一時に発砲して地獄勢を打ち崩す。しかるに閻軍は死骸を踏み越え飛び越えし、前原勢の玉込めの間を見渡し雲気王は三十六曜隊を率いて反撃、二番隊の神風連が入替ってこれと戦う。一方、篠原はその砲声に前原の帰陣を知り、四門の「木貫砲」を一時に発砲し二十八曜の堅陣を微塵に砕く。前後の敵に揉み立てられてさしもの閻軍も乱れ散り、遂に追い落とされる。これを見た雲気王は「諸々の曜備を満丸まんまるに備」え右の方に引き揚げた。その間に、前原一誠は隊伍を整え五百輛の兵器弾薬を守護して鯨の声を上げ、篠原の陣塞に引き入ったのだった。

話は、ここで終わっている。章題に見える「地獄勢を地雷火にて鏖にする」処まででは行っていないが、ほぼ結末の予想は付く運びである。冥土の地理・形勢、王宮の有様、多数連なる具体的な各将の名前、同じく具体的に見える諸戦の情勢、酒宴と夜討ちの趣向、西郷に深い縁有る僧月照の登場、連車馬等さまざまな武器の使用、地球の利用、肥後神風連や豊津正義党の援軍等々全編に鏤められていて、架空ながら軍記物・戦記物としての性格が強く、具体的な戦闘が殆ど描かれていない。『文明開化』「地獄極楽一周記」の「地獄の部」とはその趣きも細部も大いに異なるのであるが（前原一誠の登場など重なる部分も有るには有るが）、西郷隆盛の軍勢と閻魔王の軍勢との地獄での戦争という構想自体は、この『西郷地獄征討記』の設定・筋立てを夢遊が引き継ぎ、「地獄の部」の骨子

とは成したのであったらう。

『文明開化地獄極楽一周記』をこれに比較するに、右に述べた如く「地獄の部」では血腥い戦闘の場面はさらりと躲され（却って得体の知れない「一大坊主頭」などという物が登場したりもする）、閻魔大王も激しく迎撃するところか意気地無く降参、むしろ西郷の地獄に文明開化をもたらすの功績を称えるのが主眼であることを指摘して置けば足りよう。味方の大将に論功行賞を施し、新たに爵位を授けているのは「地獄の部」に独自の構成である（『西郷地獄征討記』の初編の最末尾に、銀魔王等敵将三名の「首実検」して、彼等を討ち取った永山九成と七勇士の「戦功」を称える場面は有るけれども）。尚、『西郷地獄征討記』に後述するような政治的寓意は殆ど読み取れない。

一方で、又、西郷隆盛が地獄で閻魔大王に代わって善政を布き開化をもたらすという筋の構想のヒントと成り得たかも知れない物として、たまたま管見に入ったものであるが、『鳳鳴新誌』第二号（明治十三年六月廿八日発行）、第三号（明治十三年七月十一日発行）に掲載された「冥府新聞」という無署名の記事を挙げて置きたいと思う。全編が訓点付きの漢文で、わずか三千字足らずの文章ではあるが、中々面白い内容となっている。以下にこちらも少しく詳しくその紹介をすることとしよう。

ある地方の老翁が甦生して語った「地下事情」を記者が録したものであるという枠組みである。「冥府」は地下に在り、娑婆を距ること西方およそ十万億里であるが、死者は旧称を改めて幽霊となることは釈迦如来の定める処、「冥府」に到る道は極めて「奇幻」で、府に近づくや無数の白旗を見るが、これは横浜海岸の商館が建てた「浮羅布」などではなく、三途の川辺で獯惡・無慈悲な「脱衣婆」が死者から奪って枯柳の梢に掛けた物であった。

冥府には、「羅生門」あり「戻橋」あり、亡者府内に到れば皆想うこと「我東京府下新橋停車場」の如くである。「冥府王」はその号を「閻羅提王」と言い、亡者を「一大浄玻璃鏡」の前に向かいしめて亡者生前の功罪を裁判するのを職とする。功德最も大なる者を「一等賞」と為し、罪惡最も酷なる者を「一等罰」と為すのであった。忠臣孝子、貞婦義僕や喜んで慈恵を施す者（支那飢民救恤の挙を企てた者や養育院に物を贈る者、避病院看護人で斃れた者など）は一等賞を受け、座を「天堂蓮花台」の上に賜わるし、逆臣賊子、姦婦黠奴、強盜、殺人者、生き馬の目玉を抜く者は一等罰に処せられる。焦熱地獄行きである。法螺吹きは舌を抜かれるが、「政談演説」を為すと為さざるとには必ずしも拘わらないと。「閻羅提王」は威權も絶大で、勇武絶群、鐘馗大臣にも似た者でなければならぬ。「冥府史」に拠れば、「古代」草昧無茶の世には「異形鬼物」が自ら「閻魔王」と称したが、これは百鬼を士卒とし殺戮を恣まにし賞罰も大いに濫れた。それが「随」の時に上柱国韓「擒虎」なる者亡者となり、魔王の無道、府政の不理に大いに憤り、同志亡者一千余名と謀つて「森羅殿」を夜襲し魔王を誅殺、衆に推され自ら「閻羅提王」となったのだった。その後、「宋」の代には「寇萊公」がこの位に就き、この後冥府は稍「自由憲法」（傍点原文、以下同じ）を用い、提王は衆鬼及び幽霊の「公選」を以てするという事に定まった。「合衆国民選挙大頭領法」の如くであった。やがて「豊太閤」「仏帝一世拿勃翁」と継いだと言う。そして、現今この職に任ずる者が、明治十年死したる西郷隆盛なのであった。隆盛は、生前「逆賊」であり、その罪は一等罰に値するものであるのに、罪科を逃れるのみならず進んで「冥府隊長」となったりしている。しかし、顧れば彼は元忠臣、「唱義勤王」で、多難の間に「皇家哀運」を挽回した功績がある。してみれば、功罪相殺すると言えるし、冥府の鬼俗は威武卓然凡人に非ざる者を崇ぶので、西郷に幽霊社会の望みが帰するのも謂われ無

いことではなかった。西郷は、提王と為るや「大改革」を断行、冥府の事情は一新し、尽く「日本娑婆開化」に摸せざるものは無かった。ここに於て、旧来の「浮羅々々然」たる亡者も皆奮然として「進取之氣象」を帯びざるは無く、「自治之精神」を鼓するに至つたのだつた（以上、第二号所載分）。冥府には多くの官名有る中で最も権力有る者を「俱生神」「檀拏幢」「人頭幢」の三官と為す。俱生神は「二個頭顱」から成る者で、一は威有つて猛からず亡者生前の功罪を自ら陳べさせる、一は暴悍の気すさまじく亡者が実を吐かなければ亡者も驚悸して甦生する程の大喝で叱責する。檀拏幢は「能視察凡夫不可得視之秘事隱情」る者で、「散花干貴頭某氏之閑室者」をも能く視察する。人頭幢は「能嗅察常人不可得嗅之陰臭密香」る者で「張帷幕掩蔽醜行者」をも能く嗅察する。文吏に二員有つて「修文郎」と言い、言わば記録係で、顔淵がかつてこれに當つたと言ふ。さて、今や提王の職に任じた西郷は、手始めに「冥官改撰及設置」を行つた。多くは府政上の便宜から「日本人種之幽霊」を登庸したのであつた。俱生神は二員に分離し「議定神」と名付け、大岡越州と江藤新平をこれに任じた。檀拏幢は「大明視」と名を改めて河地理亮をこれに任じる。人頭幢は「大聞察」と名を改めて板倉内膳正をこれに任じた。二官の属員は十余名を置いた。大明視の員には「精銚水」一瓶が給与されるのだつた。修文郎の職は娑婆の制に倣い「書記官」とし、頼山陽、安積良斎、中井竹山、篠崎小竹、佐藤一斎等をこれに任じ、外に「書記生」として頼三樹、梁川星巖、大橋訥庵、曲亭馬棊、狂文舎一九及び新聞記者の幽霊等をこれに任じたのだつた。それに伴いかつて用いていた鉄牌大筆は石版石筆に改める等みな軽便に従ふこととした。又、「写真師」の官を置き内田九一子をして亡者生前の所行を「浄玻瓈鏡面」に写さしめた。馬頭、牛頭、虎頭、多頭鬼の類は悉く官を免じ、新たに「鬼兵隊、巡鬼、消防鬼卒、看護鬼夫」を設けて非常に備えた。「鬼療院」には鬼

医を置き治療に当らしめるが、鬼療院は羅生門から一里「火無川」に在る。「旃檀海」に臨み、沖には「鬼洲之彼岸船」の浮かぶことがあると言う。火無川の芸妓の歌や蛇味線虎弓の音は鬼療院に在る者の鬱を散ずるとか。さて、西郷の改革は次に「六道之改革」に移る。天道・人道（所謂金色界、極楽浄土）を第一区、修羅・餓鬼二道を第二区、畜生・地獄二道を第三区と為す。その間に鉄柱数十基を建て電信線を架して各区通報させることとする。第一区長には親鸞上人、第二区長には源義経、第三区長には平相国清盛がこの任に当てられた。各区の諸道には各々監督二員を置くのだが、天道監督が大職冠鎌足・菅相公、人道監督が小松内府重盛・楠中将正成、修羅道監督が本多忠勝・桐野利秋、餓鬼道監督が伯夷・叔齋（日本人種闕員）、畜生道監督が仁田四郎・坂田公時、地獄道監督が柴田勝家・前原一誠となっている。極楽浄土も、座する物から食物、酒まで亡者の便宜を図り、自由の度を増すのだが、酒は「菩薩安」を害してはならず、犯せば餓鬼道に放逐される。修羅道も従来の惨刑を改良し、餓鬼・畜生道もその法を緩くした。地獄道は、阿毘・焦熱は合併して一大温泉場と為し、叫喚・紅蓮・倒懸の三獄は一大蓮池と為し、刀山は金墮と為し、劍樹・鉄丸は改鑄して武器を製し、亡者は或いは風呂屋の三助と為り、或いは培栽採掘する者と為り、或いは坑夫と為り、或いは鍛冶師（カヂヤシ）と為り、娑婆で官事に役せられる終身懲役囚の如き働きを課せられるのだった。その他、三途川に鉄橋を架し、森羅殿を改築して煉瓦屋と為し、羅生門外に停車場を設け、火無川駅に鉄道を設け、暗黒界に瓦斯灯を樹てるなど「開明新政」は枚挙に遑あらぬ体となった。ここに於て幽霊社会も漸く「旧来卑屈之氣習」を脱し「固有之冥権」を主張し「鬼族之压制」に抗するに至ったのであった。遂に各道有志の幽霊は相謀つて「獄會開設」を冥府に請願したのだが「准许」を未だ得ず、見聞ここに至るや彼の翁は巡鬼に拘引せられ、議定神に訊問されても翁は「性素恇怯。戰慄」口を開けず、江

ヲシヒセサツ、フルベク

藤新平の本来自ら戒めとしていた「大喝一嚇」に吃驚して回生したのであった（以上、第三号所載分）。以上がそのあらましであるが、探せばこの手の設定、筋を持った物語は他にもいろいろ新聞雑誌等の上に見出せるかも知れない。

閻羅提王が代々変わり、閻魔王は早々に誅され退場する。宋の時代にこれまた早くも自由憲法と公選制を定め、今は西郷が提王となり、冥府に大改革を施し娑婆と同じく開化をもたらず。冥官の改選と設置、更には六道の改革を行うので、地獄の開明は進み、民権ならぬ冥権が確立、国会開設ならぬ獄会開設へと赴くという筋立てで、西郷による地獄の改革・改善という点が『文明開化地獄極楽一周記』と大枠で通じている。議定神、六道の区長・監督がいちいち任命される中に、江藤新平、桐野利秋、前原一誠等の名前が数多くの古人の名に混ざっているが（「極楽の部」の方に見る名としては親鸞上人も又含まれている）、これら名前の挙げ列ねも「地獄の部」の末部、江藤新平を始めとする官爵を授けられる者の一覧を思わしめるものがある。電信や鉄道の設置の件、「極楽の部」の「長鷲」や「大佐賀」と「火無川」の地名のもじりが同工のものと認められる等の共通点も有る。だが、先に述べた通り、西郷を地獄又は冥府の王とする発想の作物は探せば他にも有ろうし、この「冥府新聞」の設定自体（先ず「閻羅提王」という設定、「冥府史」の存在、「六道」として地獄と極楽が同列のものとして扱われている等々）が、大きく『文明開化地獄極楽一周記』のそれと異なるものである事は否めない。ただ、西郷が閻魔の悪政とは正反対の善政を地獄・冥府に施して見せた、という設定そのものの共通性は揺るがない。

さて、「冥府新聞」という記事の一つの大きな特徴は、その明確な寓意性に有る。冥府を説きながら、「自由憲法」と言い「公選」と言い「自治之精神」と言い、遂にはもじって「固有之冥権」「獄会開設」と言う。自由

民権的な政治の主題が諷刺的に盛り込まれ、前面に押し出されているのである。これは、『開化地獄極楽一周記』にも共通して認められる性格である（ただし、『冥府新聞』の方が寓意性は強く、露骨に感じられる）。又、全体が、返り点送り仮名を配した所謂訓点付きの「漢文」という表現・文体上の特異性を持つが、これは、夢遊の当該書における自序にも採用されている形式であり、狂詩をも能くしたという夢遊と決して縁遠いものでない事も注記して置く。

因みに、先の『西郷地獄征討記』と『開化地獄極楽一周記』の二作については、さすがに明治文学研究の大先達・柳田泉が、その著『政治小説研究』上巻（昭42・8）において、夙に戸田欽堂の『情海波瀾』（明13・6）を嚆矢とする本格的な「政治小説以前の政治的文学」として（より具体的には「時事文学」中の「諷刺文学」として）それぞれをも別箇に取り挙げて居り、簡潔な内容説明を施している。『西郷地獄征討記』については主にその章題を示し、『開化地獄極楽一周記』については簡単に要約をした後、「西郷に対する同情と、自由民権のイデオロギーと相合成し諷刺戯作である」と述べている。ほぼ適正な評価と認められるが若干の検討を加えて置こう。

先ず「同情」一件について。死して即ち「伝説」となった英雄西郷隆盛の庶民間での人気の高さとその人物への興味の大きさは、数多くの西郷を巡る言説を生み出したと思われるが、そこには勿論西郷への「同情」を表したものも有ったろう。<sup>(8)</sup>しかし又、一方では、西郷という存在が単に種々の話説・物語の題材として用い易かった、というだけの事情も有ったろうと思われる。拔群の知名度の故である。西郷は、正に時代の英雄・象徴的人物だったわけだ。先に見て来た『西郷地獄征討記』や『冥府新聞』の記事の場合は、どちらかと言うと後者の、物語

的興味の対象として知名度の高い西郷を持って来た感が強い（「同情」の趣きが殆ど見受けられない）。而して『文明開化地獄極楽一周記』の場合はどうであろうか。苛政を布く閻魔大王を退治して地獄に開化をもたらした西郷隆盛は確かに正義の味方であり、江藤新平以下の諸將に爵位を与えて汚名挽回を図ったように見える辺り、維新の功績を死後に称えようとの意図も透けて見えるようで、ここはやはり柳田の言う通り「同情」を見て取っても良さそうである。が、再び翻って『西郷地獄征討記』の延長上に発想されたであろう物語という点より見れば又、一概に「同情」の語を以て遇することのみが正しいとも言い切れない気がする（要は作者の登場人物への思い入れに関するもので、微妙な問題と言うべきであろうが）。夢遊は本作の四年後、少なくとも二度に亘って西郷に対する言及をしているが、<sup>(9)</sup>極端な方では西郷を「真政の国事犯」呼ばわりをしているということも有って、益々「同情」と片付けてしまつて良いものかどうか迷わされるのである。

柳田の評言中の「自由民権のイデオロギー」云々に関して言えば、「自由民権」の語（特に「民権」の二字）自体は本文中に認められないものの（例えば、「冥府新聞」中の「冥権」のような明らさまに「自由」民権を意識させる寓意的なもじりの語の使用も認められない）、「政体の過酷」「自由」「専政主義」「惨課酷令」「自由政府」「聖恩」「廟堂の組織」「大臣参議」「立憲政体」「压制主義」「開進党」「守旧党」「両党の軋轢」「演説」「国安を妨害」「自由政治」「压制政府」等々の語によつて、本文中に政治的色彩、特に当時の「压制政府」から「自由政府」への転換という「自由民権」的なメッセーヂの認められる事は否みようも無い。それらの語は、立憲政体・自由民権を是とする夢遊の政治的立場を彷彿させると言えるし、来るべき政党時代を先取りしたような政党同士の間劇的な設定も含めて、十分政治的な雰囲気醸し出してもいると言えよう。ただ、次に、これによつて本作品が、

政治的寓意を主眼とした政治諷刺の作とだけ言って終われるのかと言うと、問題はそう簡単ではないようにも思われる。例えば、より現実的に閻魔の地獄を、当時の新聞や雑誌、演説会でしばしば激しく攻撃された薩長の藩閥専制政府と見立てることも全く不可能であるとは言えず、更には西郷の勝利が前年成った自由党等の自由民権派が藩閥政府を倒すに至ることを寓していると解することも或いは可能であろう。富妻那の演説で「压制政府の主義」とされていた極楽の守旧党も然り。そこに現実の政府を仮託していると見做すことは可能だ。だが、果たしてそうなのであろうか。压制主義（政府）の排撃、自由（民権）の獲得といった主張は確かに込められている。が、本作においては、政治諷刺と言ってもその描かれ方は極めて一般的・抽象的なレベルに留まっているもので、ただ「自由」「压制」等の語を繰り返して「専政主義」の不備、「自由」の尊さを強調するのみ、（カムフラージュの効果は有るのか知れないが）具体的・現実的な政治的状况を必ずしも強くイメージさせるものではない。換言すれば、それだけ政治的寓意の内容が通り一遍で過激ではなく、印象もさほど強くはないものとしても受け取れるということである。<sup>10</sup> さて、その一方で印象的なのは、意表を突く面白おかしい筋立てと（或いはその馬鹿馬鹿しさ）それを支える滑稽な文章であり、又、地獄の騒乱・極楽の混乱を通じて「開化」の便利を訴えるメッセージの強さである。本作全体に関しては、地獄・極楽合わせて書の題名通り「文明開化」に伴う世情の変化を綴り出す（『総論』ではむしろその弊害が説かれるのであったが）ことにもより力が尽されている感が又、否めないものである。文明開化によってこそ、政体の転換、自由ももたらされるのであろう。『廟堂人物論』に引き続いて『日本政事情』のような先駆的な政治的著作も物している夢遊ではあるが、一方で『花街膝栗毛』のような滑稽戯作も物している夢遊でもある。本作の主題を「自由民権のイデオロギー」というような政治的部分に

限定してしまわずに、地獄・極楽の文明開化を巡る滑稽・諷刺劇といった側面にも（その文章とも相俟って）同じ程度に注目してしかるべきなのではなからうか。これを要するに、政治的主張を前面に押し出した政治小説の類とは異なる、政治的分子の寓意と諷刺を含んだ、一種の文明開化物ないし滑稽・諷刺的の戯作と見做すことが可能であると言つて良からうと思う（その意味では、柳田の「政治小説以前」との括りも「諷刺戯作」という評言も、恐らく正しいのである）。

最後に、以上、多く「地獄の部」を中心に本作を見て来たのであるが、『文明開化地獄極楽一周記』の真の面白さの源は、特に「地獄の部」と「極楽の部」とが抱き合わせた構成になつてゐる処に実は存する。元逆賊西郷隆盛が閻魔大王を退けて地獄の国王になり、地獄の地に「開化」をもたらし善政を施す、という話自体が滑稽で意表を突いたものであり、前述の如く抽象的の域を出ないとはいへ、時代に向けられた政治的な寓意・諷刺が込められた見処も有るのであるが、極楽の方が（こちらは恐らく夢遊の独創であつたらう）却つて開化に乗り遅れ、国王は優柔不断で、視察団を出すにも党派間の関係が不穩で殺伐としてゐる有り様、開化は先ず地獄からという転倒した意外の展開、この逆転に継ぐ逆転の繰り返し（既に見てきたように「総論」は「総論」で「開化」が逆に人々の信仰心を破壊してもいた）の展開こそが本作の最大の醍醐味であり、面白味の根源と考えられるのである。

注

（一） 嘉永六年（一八五三）生まれで大正十三年（一九二四）没す。桜洲とも号す。明治初・中期の著述家として硬軟両様の著作（『琉球事件日清談判始末』明14・3、『廟堂人物論』明14・4、『日本政党事情』明15・9、『維新柱石雷名

十勇臣伝』明19・4のような硬派のものから、『全北里花魁列伝』明14・11、同12、『夢遊吉原新繁昌記』明15・11、『花街膝栗毛』明16・5のような軟派のもの、『密画挿入伊曾保物語』明19・2、『南洋大人国旅行』明20・11のような翻訳書、『徳川酒井大老実伝』明18・11、『内地東京未来繁昌記』明20・5、『立志雲間廻月』明20・6、『改良愛縁奇縁』明20・11、『政治深山桜』同前、『美談孝子之血涙』明22・1、『恋無常』明25・1のような小説、友人骨皮道人（西森武城）との共著『僻狂滑稽討論』明23・3のようなものから『絵入唐詩選』明17・8、『記事論説軌範』明18・1のような一般書まで実に幅広い）を約三十数冊（編集物を含む）出しているが、四通社の『江湖新報』（編集兼印刷人）や『朝野新聞』その他多くの新聞雑誌（野崎左文によれば、『絵入朝野新聞』『江湖新聞』『国会準備新聞』『埼玉新聞』『東雲新聞』等の名が挙がる。西森武城の『武蔵野叢誌』もこれらに加えることができる）にも編集者として記者として又投稿者として深く関わりがあり、題字・題辞・序文から口絵に至るまで錚々たるメンバーが名を連ねていることから、当時文筆界の一大著述家であったと言つて良い。柳田泉は『明治初期の文学思想』下巻（昭40・7）で、夢遊が『東京新誌』第二号（明9・4）に載せた「人情本を廃すべき小言」において大久保しゅん春しゅん馳しの名で人情本の排斥論を書いていることを紹介する際に、「本名は常吉といつて、このころの新進作家松村桜雨（本名春輔）の門生格で、十年代には雑著家、編輯者として多少の名があった。」と述べているが、「多少の名」と言つても十年代から二十年代にかけて著述は少なくない方だと思ふ。野崎左文の「亡友 大久保夢遊居士」（『東京新誌』昭3・5、『増補私の見た明治文壇2』東洋文庫 平19・3所収）など有るものの、詳しい伝記的研究は未だ存しないものようである。因みに、西田長寿の『明治時代の新聞と雑誌』（昭36・8）中に「大久保常吉は夢遊と号し、晩年は東京府下武蔵野小金井村の村長であった。故宮武外骨翁が私に語られたところでは大久保はそれほど文章のかける男ではなかったとのことである。」との文言を見るが、復刻版『武蔵野叢誌（下）』（昭53・10）の

解説で、遠藤吉次はこれを引きつつ「首肯しかねる語」と評している。尚、遠藤は、夢遊こと大久保常吉が明治十五年八月十五日に自由党に入党している事やその政談演説等についても触れている。

- (2) 卷末広告に載せる書名だけ掲げてみると、『名演説集誌』、菊地三溪先生講義・門人堀中東洲君筆記『日本外史講義筆記』（近刻）、『日演説大家集 初編再板』、町田岩次郎君編輯『東代言人列伝 初篇』、工藤武一君編『詞訟顛末録』、笹島吉太郎君纂輯『頭条約改正纂論』、長沼熊太郎先生序・杉山重義君著『通国会之組立』、甲田良造君序・大久保常吉君編『魯帝弑逆記』全二冊、<sup>米</sup>『欧国会起原史』、中島信行君題字・丸山名政君著『通俗憲法論』、『民権弁妄』、井中庵田鶏老人編輯『新風雅の友 式編』、久保田彦作先生編輯『名俳優列伝 初編』、山東京伝著・仮名垣魯文先生序『手段遍物娼妓絹籠』、式亭三馬著『手摺廓節用』（近日出版）とあり、就中『魯帝弑逆記』（全二冊、明14・4・6）は見られるように夢遊の編に成るものである。尚、本書の九カ月後に刊行された『夢遊吉原新繁昌記 初編』（編輯人国分広志・出版人法木徳兵衛 末尾の「法木書屋出版目録」では、この『文明開化地獄極楽一周記』の広告文として、「著者夢遊居士が午睡の一夢に其魂を三千世界の他併も十萬億土を隔てたる地獄極楽に飛し該地の騒乱と開化の有様を滑稽文を以て記したる古今無類の珍本なり」（傍点筆者）との文言を見る。

- (3) 縦十八・五cm×横十二cm。文字表紙。四周の飾り枠を三分割し、順に著者名と書名と発兌年月・出版社を配した表紙で、中央の書名部分のみ黒地に白ヌキで示される。奥付には、「明治十四年十一月 日御届 同十五年二月出版、定価金二十五銭、編集人 神奈川県平民 大久保常吉 牛込区市ヶ谷田町一丁目十七番地福井皆方寄留、出版人 東京府平民 法木徳兵衛 日本橋区元大阪町拾一番地、発兌元 東京日本橋区元大阪町十一番地 漸進堂」とある。『明治文学書目』に拠ると、同じく四六版の仮製本（紙薄表紙仮綴本）もあるようだが筆者未見。

- (4) 撫松の題字は、

娑婆苦樂人如問笑指山腰一朵雲

というもの。愛花の題辭は次のようである。

歷觀冥府盛衰風閑夢從來又有功笑殺南華會化蝶栩栩自得一花叢

愛花の方は莊子（南華）の胡蝶の夢の故事を踏まえている。

次に、魯文の序言は西鶴の名を挙げて始まるもので、その後半の三分の二程を左に示す（原文総ルビ）。

茲に大久保夢遊なる人何の夜如何なる夢の通ひ歎幽冥世界に笈を負て八大地獄死出の山劍山の峨々たるを踏血の池の混々たるに臨み無辺の熱海八苦の地凡十萬八千里内閻羅王土の広きを徑遂に万里の滄波を凌ぎ極樂浄土におし渡り莊嚴の結構威徳巍々たる景況を縦覽し奇異の法音を耳朶に止め遊戯意に委すと觀て醒覺の我に帰り夢中見聞の奇事心耳に暗記する所を演て当編の稿成れりと嗚呼羅漢中三世の啞紫姬未來の情獄共に妄説の罪と雖も此夢遊子が記事に於る現に夢中の実現にして浄玻璃の鏡にかけ閻魔王照覽ありとも題号の看板詐偽なきハ浄蔵も朝比奈も必定保証なすらん余や現在娑婆私窩子の巢窟を探りしのみにて未だ八万奈落の底に至らざれば證人に立を得ざれど当編の想像説當らずと雖も遠からざるを覚ふ嗚呼明治年間の一奇編

當今龍集十五年第一月六日大日本無垢浄土京橋区本材木町第三坊仏骨庵の石倉中に秃筆を舐つて卒然新編の序言成る

玩仏居士 假名垣魯文記

又、醒夢居士の序の後半は左の如し（原文ルビ僅少）。

今友人夢遊子ハ和想兵衛の如く舟を借らず又夢想兵衛の如く凧も用ひず閑窓午睡の一夢に其魂を大千世界の外併も十萬億土を隔てたる地獄極樂に飛し備さに其騒乱と開化の有様を記したり夢耶々々夢に似て夢にあら

ず亦以て微意の存する所を知るべし只是夢遊子其名に負かずと謂ふべきのみ是を序となす

明治十五年一月下浣

醒夢居士しるす

本書が、遊谷子の談義本『和莊兵衛』やそれを粉本とした馬琴の読本『夢想兵衛胡蝶物語』の系譜に連なるものであることを示唆している。但し、醒夢居士については現在未詳である。

(5) 夢遊の自序は、後醍醐帝の夢の例（楠正成の一件）など引きつつ、後半次のように述べられている。

聖主既有レ夢英雄豪傑豈無レ夢哉矧レ於レ非其英雄豪傑者乎余一日無聊倚レ几牛睡而夢非英雄非レ豪傑者之夢或雖レ不可知レ依レニベケ主義被レ襲魔夢亦是古今未曾有之珍夢即開化地獄極楽之景況也余惜レ独令レ朽ニ于胸裡ニ托ニ秃筆ニ而公レ之以欲レ濟ニ度ニ一切衆生若夫看官為ニ一切空益無ニ放棄ニ幸甚焉

明治十五年一月下浣

編者識

(6) 山田俊治は「政治小説の位置」（新日本古典文学大系 明治編『政治小説集(一)』解説 平15・11）の中で『文明開化地獄極楽一周記』について触れ、「物語は完結していなかった。」「結末は『地獄の帝都東京』を訪問することを予告して終わっていた。これも自由な安楽国の未来が描けなかった例と見ることができよう。」と述べ、「物語と寓意が調和できない点が、寓意としての小説の難関なのであった。」と指摘している。結末についての一つの見方ではある。因みに、本作で描かれなかった開化後の「東京」という主題を引き継ぐものとして（若干こじつけめく

かも知れないが）、同じ夢遊の『内地雜居東京未来繁昌記』を据える見方も可能かと思う。

(7) 編輯兼出版人 金田儀兵衛、初編 明治十二年四月十四日御届 五月出版 全二十五丁「席文」中に見開き口

絵一葉 定価十五銭、二編 明治十二年十一月廿一日御届 十二月出版 全二十五丁 定価十銭、どちらも和装本で本文総ルビ。

初編の「席文」(花鼎舎記)には、「浮世ハ恰も夢に似たり暴徒地獄に兵弾へいたんを開き眼の古今いまだ見ざる処滑稽去々然として変化限なし」とあり、又、「西郷地獄征討記二篇叙」(花鼎舎述)には、「地獄も復空理也」また「玄々たる為幽冥の秘論作的知らん」なんぞ「客大に笑て斯る譎言を吐に似ずこの這書頗る旧弊ならずや荅て曰然ならず一句可成事を聞ば意開明に趣おもむく斬髮洋姿を文明と云ん開化に今古の論非んや」等々の語が見える。

- (8) 柳田泉は、『政治小説研究』上巻で、幾つかの西南戦争物を挙げる中で、『本絵鹿兒島戦記』(明10・2)、『西南太平記』(同・3)、『西郷隆盛蓋棺記』(同・5)、『参考鹿兒島戦記』(同・9)、『西郷隆盛夢譚』(同・9)、『鹿兒島紀事』(同・9)、『真西郷隆盛一代記』(同・12)等々に、西郷の英雄なることを賞めていて、西郷への弁護・同情の意の汲み取られることを指摘している。

- (9) 少しく後の夢遊の『維新柱石雷名十勇臣伝』(春陽堂 明19・4 著者名は大久保常吉)では、佐久間象山、徳川斉昭、木戸孝允、大久保利通、坂本龍馬、大村益次郎、西郷隆盛、武市小桶、高杉晋作、岩倉具視の十名の伝が取り挙げられているが、ここでは西郷隆盛に関する歴史的エピソード(僧月照のこと、薩長同盟のこと、江戸開城のこと、西南の役のこと等)が述べられているだけで、特に西郷の人物評価にまでは及んでいない。西郷の伝の末尾は、次の通り。

九月廿四日城山ニ於テ敗死ス氏兵ヲ起シテヨリ月ヲ閱スル凡ソ八ヶ月英魂既ニ去テ復タ尋ヌルニ由ナシ嗚呼  
悲夫

「嗚呼悲夫」に若干の西郷への同情を見て取ることが可能であろう。ところが、桜洲散史校訂、池田柳州編纂(奥付では、校閲者大久保桜洲、編輯者池田忠五郎と見える)に成る『訂校鹿兒島太平記』(春陽堂 明19・9)の桜洲散史こと夢遊による「鹿兒島太平記序」では、事情が一変する。後半を引くと、

之を再言すれば直接若くハ間接に社会公衆の賛成を得て成立したる革命ハ萬一成就せざることあるも之を以て国事の犯罪と云ふべからず而して真成の国事犯と命くべきものハ輿論の賛成を得ると否らざるとに拘らず自個の私怨を霽さんが為め若くハ富貴利達を望むが為めに起したる内乱に外ならず然れども一国の君主若くハ政府ハ固と国民が公認する所の君主政府なり殊に民主政治、立憲政治等の邦国に存在する君主政府ハ国民の協同に由て成立するものなれば之に反対するものハ深く其の事情を探索するを要せず直ちに国事犯を以て見るも大なる誤謬なかるべし今此の書に記する所の西郷隆盛の如き啻に国民が公認する所の上御一人の叡慮に背きたるのみならず一国の輿論に戻りて革命を企てたれば之を以て真成の国事犯と云ふも不可なきが如し是ハ吾輩が当世に媚ぶるの辞にあらざ実<sup>じ</sup>に公平の判定なるべきを信ずるなり

明治十九年八月念五

とあつて、西郷隆盛を、ここはむしろ「国事犯」と断罪しているのである。本文の方では、西郷の最期に際し、嗚呼西郷等明治聖代の元勳にして上下ともに其の徳を賞誉するところなるに一朝の不平より終に城山一片の煙と消へたるハ哀れと謂ふも愚かなり古人の人生を以て草頭の露にひとしと云ひたるも実に道理にこそ然れども其の英名ハ永く千載に伝はりて消滅せざるべし理非も得知らぬ頑童すら軍事して遊ぶ時ハ我こそハ西郷大将ならんと其の名を称へる如きハ君が功業の偉大を慕ふに因るなり然らバ君が今世に受けたる汚名ハ後世に於て之を雪ぐに至るやも測りがたし人世の行路甚だ艱難なり君の蹉躓固と怪しむに足らざるなり

と、むしろ西郷に同情的なると好対照を成す。「序」の西郷「国事犯」呼ばわりは、真に「当世に媚ぶるの辞」ではなく「公平の判定」なのであるうか。『維新雷名十勇臣伝』との間に存すると見えるこのギャップをどう解釈したら良いのか、後考に俟ちたい。もし西郷を「真成の国事犯」と夢遊が見做していたのなら、それより四年前（執筆

は約五年前)の『開明地獄極楽一周記』中の西郷にもそれは及ぶのかどうかとも併せて。

(10) 宮崎真素美は、『地獄極楽怪化乃夢 前編——ユートピアとしての冥府——』(『稿本近代文学』第十四号、平2・

11)の中で、夢遊の『開明地獄極楽一周記』を当該作(明治二十年三月出版)と比較・対照し、柳田泉の梗概など引用しつつ、本作について次のように述べている。

柳田泉氏が「諷刺戯作」としてもいるように、作品中であからさまな政治諷刺をおこないなから、舞台を〈地獄極楽〉に置き、なおかつそこでのできごととは作者の〈夢〉の産物であるといった二重のカムフラージュを纏うことで成り立っているのが、夢遊の『地獄極楽一周忌』である。

そして『怪化乃夢』に比して「思想面でのアレゴリカルな側面」を見出し得るとする立場に立ち、柳田泉の「明治日本のユートピア思想」(『世界』昭39・1)中の叙述を援用して、次のように続ける。

先の夢遊の作品は、ここでいわれているような政治的理想(「一般的自由民権論」を指す——筆者注)を根幹に持つものの流れに位置付けることができ、〈地獄極楽〉という空間を自らの主張するところの手段として利用しているのだけでも、当面の作品における〈地獄極楽〉の空間は、これまでみてきたようにそういったものとは異なっている。

「あからさまな政治諷刺」をカムフラージュした、「アレゴリカルな」作品として、地獄極楽はその政治的理想の表明の為の「手段」だと言っているのだと思うが、カムフラージュを必要とするような「あからさまな政治諷刺」と言う程に強い政治的メッセージが込められているようには筆者には感じられないのだが、どうであろうか。勿論、圧制から自由へという主張、又、党派間の争い等も主たる筋なので、十分政治色は濃いのであるが、飽くまで「戯作」レベルのものに過ぎないという面も見逃してはならないように思う。

大久保夢遊『文明開化地獄極樂一周記』を巡って

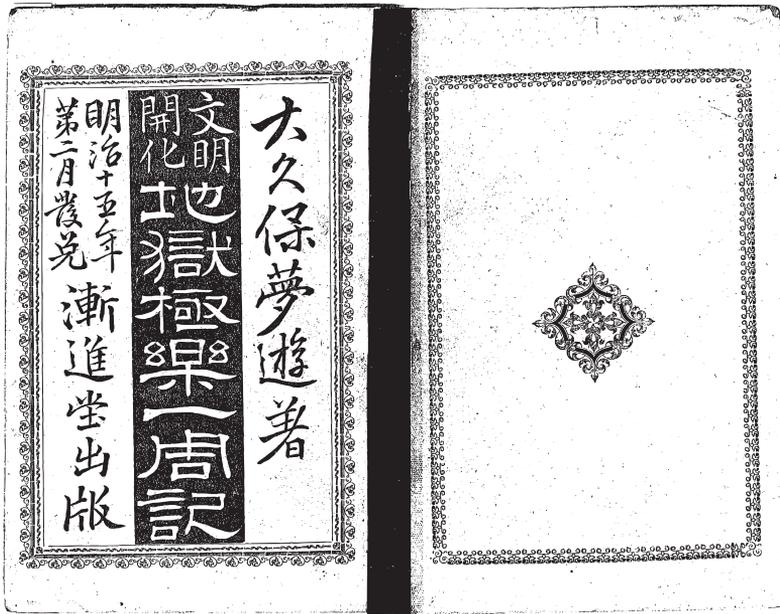


図1 表紙

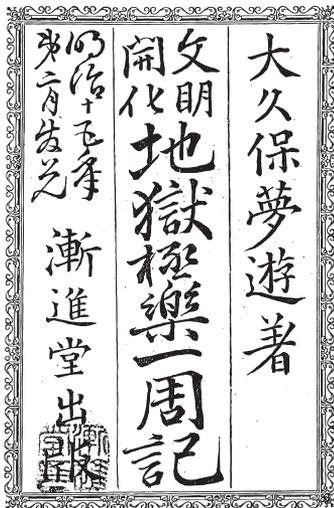


図2 扉

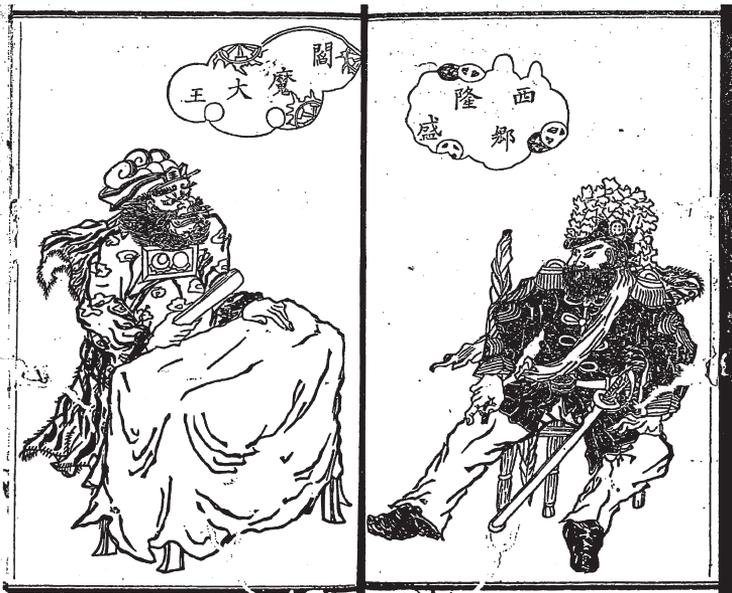
(付記) 本稿は、平成二十一年度成城大学の特別研究助成金「日本における漢字テクストの表象と文化の統合的研究」による成果の一部である。



図4 口絵(裏)



図3 口絵(表)



参考 『西郷地獄征討記』口絵 (国立国会図書館蔵)